



TITLE:

漁業につきての一管見

AUTHOR(S):

財部, 静治

CITATION:

財部, 静治. 漁業につきての一管見. 経済論叢 1929, 29(5): 751-756

ISSUE DATE:

1929-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129811>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會

經濟叢論

第五號

第二十九卷

昭和四年十一月一日發行

論 叢

營業稅に於ける累進課税

法學博士

神戶 正雄

平均生産力説について

文學博士

高田 保馬

我國に於ける生命保險業の首唱と先驅

文學博士

三浦 周行

經濟靜學と經濟動學

文學博士

米田庄太郎

說 苑

北米合衆國の農業問題

經濟學士

八木芳之助

景氣變動と日本資本主義の成立

經濟學士

谷口 吉彦

明治政府の貸附金

經濟學士

吉川 秀造

雜 錄

漁業についての一管見

法學博士

財部 靜治

徳川時代の商人カルテル

經濟學士

菅野和太郎

獨逸信用組合の近狀

經濟學士

楠見 一正

禁漁制度に就て

經濟學士

岡本 清造

新地租法案の稅率

經濟學博士

汐見 三郎

近著外國經濟雜誌主要論題

雜 錄

漁業につきての一管見

財 部 靜 治

一、撫大同之運、求無彊之休(本草序例中の一句)とはそれ眞か謬か、何れにしても人は由來陸地により、その生を養ひ來れるのみならず沿岸住民は古來その命を支ふるため、大部分漁民としての自己の熟練をたよりとしたり。されど最近世界の漁業は、地方ローカル、フリース、フョー、アー、ローカル、ニード産魚を地方需用のために、捕獲する以上に意味する所あり、漁業區域に關する知識博大となり、漁獲法發達せるより、その産業は皆に國民經濟上重んずべきのみならず、世界の商業 world commerce 否世界經濟上須要の一地位を占む。

魚の諸貯藏法及取扱方進歩して、全世界を通し弘く之を分布せしむるに至り、諸大陸の奥地として従前魚

食 Fish food を解せざりしものも、その住民今や之に

慣れて怪しまざるに至れり、而して此進退を促すため

預りて大に力ありしは、乾魚法、燻製、冷藏法及罐詰法

の發達に存したり、夫れ天地之養シヤ人也、將無厚乎、

特人自薄フスル之耳(生産語、鳥獸第一參照)とは大宰春臺の

觀せし所、人口食糧問題朝野の間に喧傳せらるること、

特に甚しき今日に當り、天地の人口給養力無限なりと

して、樂觀するが如き口吻に對しては、俄かに贅意を

表するを憚る者なりと雖も、別に天地親から人を養ふ

に非ず、物資をして人に給せしむること厚きと薄きと

は、人力そのものにより決せらるること多きの趣旨

を、説破せるや巧みなりと謂ふべく、その趣旨は恰も

水界天産物につき、痛切に之を感ぜずんば非ず、海は

栽種を須たすして繁殖すべき寶の源泉として重んずべ

きも、國民の氣力發揚の源泉としては、一層重んずべ

きを想はずんば非なるなり。

二、獨逸の經濟學者或は説いて曰く、漁撈とは魚及
その他の有用水棲動物捕獲を目的とし、先占分子に富

むべき經濟活動なり、低き開化階段にありては、之がために人の至要食料源を授くること珍しからず、されど高き發展階段にありても、尙ほ依然として肉食 *肉食* *ischnahrung* の著しき部分を授け得べしと、同國經濟學者が往々にして肉と謂へば、鳥獸肉否單に牛肉の意と無雜作に解釋し、魚食は肉食に非るか如く、看過し去るの風あるに對比し、適切なる見解を立てたるものとして、推稱するの値あり、されど又一面より考ふるに、右の所說中には尠くとも本邦國民經濟の實際に照して評する限り、淺薄とすべき分子も含まるゝことを注意すべし、即ちその説明中有用水棲動物の捕獲を目的とすと謂へるも、食用としての主たる用途以外種々の用にも當てらるべき漁獲物中には、水棲動物のみならず、水産植物も亦含まるゝことは諸種の鱗介以外、種々の苔蘚藻類が邦人の食膳に上さるゝこと尠からず、本邦國民經濟否一般に國民の營養に、資する所淺からざるを想はゞ直ちに看取し得べき所、實に本邦普通の經濟學者には、今日殆んど顧みられざるの觀ある一好著

P. L. Simmonds, *The Commercial Products of the Sea*, 1878 が、夙に明治十四年濱野定四郎及伊藤茂右衛門の兩氏により、邦譯として刊行されし「海產論」中(四及五頁)懇切にも「潮海の地は假令地味豐饒ならざるも人を養の力は山間の陸地に勝れり鯨、海豹、海牛海馬等の胎生獸より大小魚類甲介の類乗軟質にて動植二物の性を兼ね且つ胎生動物の性を有する蟲類より成立せる珊瑚の類に至る迄實に枚舉に遑」あらず「其他海神は水底に生じ或は水面に繁茂す是亦種々の利用たり」と説ける所以なり。而して右の考察に基づき、自から經濟學理の結構にも、工夫を要する點惹起さるべきを、想はずんば非ずと雖も、今本管見上専ら問はんとする所は茲に非ずして、寧ろ右の事實と同様簡明なるに係はらず、經濟學者の取扱上沒却され易き他の一事理にあり。

三、獨逸の經濟學者漁業を分つや、陸内の淡水(河川、溪水、湖等)にて營まるゝ内水漁業 *Binnenfischerei* 海岸を距つること三海里未滿の海にて營まるゝ沿海漁

業 *Kristenfisherei* 右の如き沿海國の領海以外の海上にて營まるゝ遠洋漁業 *Hochseefischerei* に三別するを

例とす、されど一旦漁業の實際に鑑みて考察せんか、特に沿海漁業に關するかゝる觀念の仕方によき、更に立入りて吟味するの要あるを想はずんば非ず。

沿海は即ち領海なり、その區域内にて行はるゝ漁業は即ち沿海漁業なりと簡單に解するは、立法上行政上の取扱よりせば、恕すべきことなりとするを得ん、されど沿海漁業の成立及盛衰を、實質的に考察するの趣旨よりせば、特に海洋中陸に近き部分が、水族棲息の場所として、如何なる實況を呈するかにつき、相當の注意を拂ふの要あり、水族の種類及分布が、陸地よりせる海の遠近以外、特に海水の深淺により、左右せらるゝこと淺からざるの基本事實につき、全く盲目なるの嫌なきを要す、かく觀し來ると共に吾人は、*Harmsworth* 百科辭書中蘇格蘭健康省檢察官 *Gerald Leighton* が、漁業を取扱へる一文中要領を得たる言説あるを發見し、漁業經濟に關する見聞淺薄なる予輩にとり、參

考となれるもの多きを想ふ儘、以下主としてその所説に則り、聊か叙説を進めんと欲す。

海の魚につきては沿海及遠洋の魚以外、深海の魚を分ち考ふべし、沿海の魚は陸に近き海の水面か又はその直下に棲む、されど一部のものは砂底を有する淺沿海に棲む、他の一部は岩壁を陸地との界となせる沿海に棲む、遠洋魚は公海の水面に近く棲み、偶々海岸近く來るゝあるも、産卵のため又は餌を索めて然るのみ、されどその大多數は、公海にて卵を持ち、游ぐ者としての自力のお蔭、又は海流の助けにより、普ねく大海を游泳す、深海魚は光、溫度及波瀾の感應を蒙ること、極微の淵に棲む、但し是等の魚群は、嚴然たる分界線により分たるゝを得ず、寧ろそは漸次にその姿を沒し、又魚は處らくは一群より他の群に變ずとすべく、是等の變化は餌探しのために惹起さる、假令ば岸に近き海の水面は、時として幾多の小介甲類又は軟體動物を宿し、公海の魚は之により生存し得べきことあるも、夫等の魚はその順番よりせば、恰も亦之を餌食

とする大魚に逐はれ、海岸近く來れりとすべきことありとす。

右の所説は素より大體の一考察に外ならずとすべきも、諸國海洋漁業特に沿海漁業問題を考ふるに當り、沿岸漁民の特質及能力を考ふる以外に、沿海の狀況及その中に發見さるゝ生物の性情に就きても、多少の識別的考察を加ふるの要あるを、覺らしむるの料となすには足れり、簡單なる一例證により之を考ふるも、佛蘭西沿海漁業がその產物中に、鰯、牡蠣の如き小鮮を數ふるに反し、獨逸の海洋漁船が何故に、北海ノルディ及バルチック海の大目魚捕獲を主とするか、そは元來右の如き觀想を下すがために、自から水釋し得べき所なり、此點につき聊か本邦沿海漁業につき考ふるに、尙かに意を強うするの念なき能はず 本邦は由來四面環海たり（朝鮮及樺太の一部を領有せる今日に際し、此言明に一部の制限を加ふるの要あるは注意すべし）されど鱗介の富宇内に冠たるの譽を揚げ得べきためには、簡單に之を、環海の一事由のみに歸し得べしとする能はず、之

につきては更に本邦海岸線が割合に長く（石渡延世地理統計要覽によるに、七、四三二・八六里即ち二九、一八九軒なり）同時に近海の水深が漁業のために、恵む所多きを併せ考ふるの要あり、試みに之を専門家の一言明に徵するに、岸上博士の増訂水產原論（明治四二年發行）中には「本邦周圍の滿潮線より百呎線までの海、即ち漁場として用ひらるゝに最適したる處の面積は、約十萬平方哩にして、全地球表面に於ける同上の面積の、約百分の一に當る」（同書二頁參照）と説き、同博士同年の著書「海と魚」にも同様なる説明を重ね、唯正確なる事は素より不明なる旨附言せり、（一六〇頁參照）加之後掲書中にはその以上に、漁業のため本邦の地勢有利なるを力説せんとし、「吾々の食物其他の用に供して居る水產動物を捕るには、最も多く百尋以内迄の處を求漁リウので有るが、二百尋三百尋と云ふ深い水中迄も漁をして、其處から食用の魚類を獲ると云ふ事に就ては、日本が最も發達して居るので、他國には罕なる事で有る、日本では何故に斯の如く深海の漁業が發達して居

るかと云ふと、我國の近海は比較的深く、百尋以上の水深は陸地より數里の間に接近して居る處多く、其上に漁業者の數が非常に多いから、勢ひ進んで深海の漁業に従事する様に爲つたので、東京灣、駿河灣、富山灣等は、何れも皆な灣内へ百尋線の灣入して居る處で有る（一八頁參照）と説けり、吾人は専門知識を有せざるを以て、素より右の主張に對し嚴密なる評論を、加ふるの能力を缺くと雖も、本邦の地勢が何故に漁業の利を占むるかを尋ぬるに當り、相當に之に信賴して可なりと考ふる者なり。

四、人多くして濫獲の弊に陥り易く、天然の遺利なきの歎を發せしむるは、恰も沿海漁業に於ても亦繰返さるゝ所なり、かくて西歐經濟學者により唱へらるゝ地力耗盡の説は、その適用又は準用を水界にも及ぼし得べしと考ふべきや、或は李悝地方を盡すの説によりてその流れを汲み、人智人力により努むる所未だ足らざるがために、海洋の遺利未だ盡すに至らずと大體に觀想すべきや、こは漁業の將來を考ふるに當り、迂

遠と評すべきが如くして、實は眞面目に攻究さるべき大問題とすべきを想ふ、現に本邦全州の沿海に於て漁業の産額漸次減少するの傾向あり、是れ最も深憂すべき所なりとは、岸上博士によりても説かるゝが故に、博く之を國民經濟國民給養問題の見地に移して考ふる場合、益々その忽かせにし難きを想ふ、吾人は今此問題を茲に掲ぐるに止め、讀者と共に一層攻究を積まんとことを期するも、前記 *Legation* が英國につき恰も此點に關聯して説ける所は、參考の値ありと考ふるを以て、茲に附説せんと欲す、その説によるに島としての大不列顛の地位は、漁業上に於ける無双の長所を同國に授けたり、政府の報告書に示さるゝ莫大の産額により推測するに、魚の量は時を重ぬるに隨ひ、減ずるの外なしとすべく、さなくばその供給無盡藏なりとすべからん、何れにしても魚にして無理なき取扱を *Management* 受くとすべくんば、多分後の推測を眞理とすべからん、その理由は生物學的なり、詳言すれば魚に備はれる非凡の再生力に由來す、一の鰯は年々二

萬乃至三萬に殖ゆ、そは鰈及大口魚その他數百萬を産出すべき魚に比すれば、少き計數なり、かゝる蕃殖力あればこそ、惟ふに假令ば蘇格蘭鯡漁業のみにて、年々約十億の同魚を取扱ふの理由を解すべけれどせり。

理論的見地よりせんが、無害なる魚は凡て食用に供し得べく思はれなん、されど海中の鱗介悉く食用(その毒を併せ觀念すべし)に供し得べしと限らず、又一般にかゝる用途に當て得べきもの、實際にありては残らず諸國の庖厨に上さるとする能はず、こは種々の理由より制限せらるゝことを考ふべく、就中水産物に對する國民の嗜好、並に之に伴ふその風習及經驗如何は、此點につき大關係あり、特に漁業に秀でたる我邦が、魚食國民としても亦その名あるにつきては、かゝる觀點にも深甚なる注意を拂ふの要あり、南紀の學者畔田伴存(寛政四年—安政六年、即ち西曆一七九二—一八五九年)は幾多の好著を傳ふる中に、約百年前の一著(文政十年)としては「水族志」千編を遺し、そは古人の手に成れる魚

介譜中、精しきを得たりとして推さるゝ所なるが、その自叙中にはその以前に於ける本邦學者の例に倣ひ、總てを漢名に撮り和品の之に相當せるを、漫然摸するが如き態度を以て、魚品の研究上特に誠しむべしとし、所謂雲中白鶴非_ニ燕雀之網所_ニ能_レ羅_ニ也として之を罵倒し、國名又方言は雖_ニ其言鄙野_ニ足_ニ以_レ備_ニ用_ニとするの趣旨により、克く一家研究としての本書を成せり、惟ふに繁多なる魚介藻類中、餘りに日常普通の食品として慣用せらるゝがために、現今尙不知不識輕視せらるゝものにして、輒近學理の審問に照すこと一層深からば、國民の食糧及營養問題研究の目的上、却りて重んずべき寶あるを覺らんとするは、一遍の空想に過ぎずと斷じ兼ねる所、吾人は偶々古人の一書を紹介せるを機縁とし、殊更に之を附言するの無意義ならざべきを想ふ。